
私の取扱説明書

たくみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の取扱説明書

【Nコード】

N1450BS

【作者名】

たくみちゃん

【あらすじ】

相手の気持ちかわかる少女と二択の強い少年の物語

One

空が見えた。

俯くと、私は腰まで海につかっているのが分かる。

もう一度、空を仰いだ。

水平線で分けられた空と海は、果てしない広がりを見せている。

目線を落とすと私の腰もとの先、海の底が全く見えない。

ただ、海の果てしない深さをうかがえるような黒い青。

海に浸かっている私の体の近くを小魚たちの影が泳ぎ、海の波が少しだけ私の体を揺らす。

見渡す限り島も何もない。

だけど、空を飛ぶ鳥たち、天に上る入道雲、さんさんと照らされる太陽。

だから、私は怖くはなかった。

西から日ののぼりが訪れ、東の空に日が沈んで、空はずっと晴れ続けている。

それを、何度も何度も繰り返していくうちに、海の水位が私の首元までやってきていた。

そして、海は私を飲み込んだ。

水の中なのに、あまり息苦しくない。

私は仰向けになって、水の中から空を眺めた。

水の屈折で、空の色が白く歪んで色が混ざり合っていく。

微かに私の心臓の鼓動の音だけが感じることができる。

そして、海面が遠のいていき、私の体は徐々に深海へと進むのがわかる。

徐々に空からの光が遠のいていく。

私はうつ伏せになって深海に目を向けた。

深海の暗さで、底を全く感じるができない。

だんだんと、水圧で息苦しさを感じてきた。

私は、「助けてほしい！」とただ落ちていく深海の先に手を伸ばしていた。

私の取扱説明書，One，

いつものことながら鼻に着く。

なんだろう？この夢を見るといつも凄いイライラする。

不意に顔を上げた場所はいつもの高校の教室。

そして、なぜか私はがっかりする。

桜の匂いっていうのかな？野草のような匂いが私を少しむせさせた。

教室の窓が全開に開けられていて外の校庭を見ると、すでに校庭の桜は散り始めている。

私は粉くさい匂いに気づいて黒板のほうに顔を向けた。

いつものように学生を前にしてワァワァと先生が何か叫んでいる。

授業の時だけ、先生の香りしかない。

もちろん、それはそれでうっとうしいけど。

私は顔をもう一度机の上に埋めようと思ったが、仕方なく顔を教卓に向けた。

古文の先生がもう何度も習った古文を必要に語りかける。

「これは今度の受験に出るぞ！」 「憶えておかないと点が取れない」と私たちの不安を巻くし立てる。

いや、私を除いて。

「先生！質問なんですが！」 私は大声を出して手を上げた。

それに気づいて、古文の先生は少しアタフタしたが大きなため息をついた。

「なあ、東條^{とうじょう}。お前は大学推薦組みだろ？勉強しなくていいんだ」と古文の先生は私の頭を軽く小突く。

そして、また古文の先生のきな臭い匂いが私を包み込む。

痛い所を突かれたくない、そんな思考が先生から合いまみえる。

私はワザとらしくため息を大きく漏らした。

もちろん、古文の先生に対する抗議のため息だ。

古文の先生はそれも承知で、私の抗議をスルーして授業を続けていく。

そうこうしているうちに、授業の終わりのチャイムが鳴った。

それに気づいた古文の先生がいそいそと私の教室を後にする。

「東條、よくやってくれた」隣の席の真面目そうな男子が私の肩をたたく。

「もっと頭の固いコブンに言ってやってよ？」今度は後ろの席のちよつと茶髪にしたチャラチャラした感じの男子が私に言う。

古文の先生は私たちの副担任で、いつも担任の先生の後ろを歩いているので、古文と子分をかけて裏ではみんな「コブン」と呼んでいる。

二人の男子の卑屈感や妬みの香りがする。

それを私はあいまいに頷きながら、そう言えば次がお昼休みだと気付いた。

「さすが、歩あゆみかっこいいよ」香子きょうこが私の肩をたたき、嬉しそうに言う。

私は東條とうじょう 歩あゆみ。ただの……いや高校三年生だ。

「何だろうね？私、古文の先生に嫌われてるのかな？」と私は香子に少しおどけて見せた。

「何言ってるの？」そう言って香子は私の机の上にお弁当を広げた。

香子とは高校一年からの三年目の付き合いだ。

でもそんなことは関係なく、次に香子は何を言うとしているのか私には分かっていた。

少し甘い香りがするので、香子はかなり機嫌いいようだ。

「それは置いておいて……でもね、……
・野球部の落合くんは私のことをどう思っているのかな？」といつもの香子の世界に私は付き合わないといけない。

感づかれないように、浅いため息を私は漏らした。

「野球部の落合くんも香子が気になってるんじゃない？」私はリクエスト通りの言葉を香子に言った。

それを聞いて香子の眼が輝く。

こうやって、人間は相手から欲しい答えを与えられれば満足する。

それが嘘か真かなんて関係ない。

そして、・・・・・・私は相手の欲しい答えを100パーセント答えることが出来る。

香子の言葉をぼんやり聞きながら、自分にこの力が開花したのかを考えていた。

物心ついてからだだったかな・・・・・・私が、匂いで相手の考えが分かるのに気付いたのは。

実際にはアドレナリンなどのホルモンにもかすかな香りがあるよう

で、訓練された人では相手の喜怒哀楽などは大まかにわかるらしい。

でも、私はそれ以上に相手の思考の部分までわかってしまう。

「ねえ？ ちょっと話聞いてる？」 香子は訝しげに私を見た。

「聞ってるよ。あのコブンの話でしょ？」 私は笑顔で肯いて言った。

それから、また永遠と香子の話は続き、私は相槌をうっていく。

授業が全て終わり、今日私は掃除当番だ。

皆で机を教室の後ろに持っていく。

この瞬間が最も教室が匂いで騒がしい時間だ。

これから遊ぶとか、掃除がめんどくさいとか、宿題めんどくさいとか、勉強したくないとか、受験がだるいとか。

嫌なことにこの思考の匂いは鼻をつまんでも、風邪で鼻が通らなくとも感じる事が出来る。

クラスの皆は・・・いや一般的な考え方では自分自身が特別な人間になりたがってるみたいだけど、私はこの力を恨む。

相手は私の気持ちなんか全くお構いなしに、相手からの一方的な声のない私に対して中傷。

不公平であり、何も楽しくないし、何も面白くない。

ただわかることは、私はただこうやって相手に合わせてなんとなく人生を乗り越えて終わってしまうんだろうなって。

こんな退屈で楽しくない人生だったらいらない。

「ねえ？この前のテストどうだった？」香子も掃除当番なので、箒を吐きながら訪ねてくる。

「98点かな」私は用意された答えを言う。

「相変わらずの天才ぶりだ」香子は大きなため息をついた。

私は香子がテスト前にしっかり遊んでいるのが分かったので、あんたが勉強してないからでしょ？ なって言えたら爽快なんだけど。

私は代わりに苦笑いを香子にお返しした。

とりあえず、顔色がばれそうなときは苦笑いと愛想笑い。

私が17年間生きてきて編み出した技だ。

教室には掃除当番だけ残り、せっせと別れて掃除していく。

教室の半分を箒で掃き終わり、机を教室の後ろから前に運んでいく。

「そういえばさー、歩ってまだ寺岡と付き合ってらてんの？」香子が尋ねるので私は肯く。

「寺岡は顔とスタイルがいいのは認めるけど、歩も物好きだよね」
そう言って香子は小さいため息を漏らす。

確かに、っという表現で私は大きく肯いた。

「歩……顔以外に寺岡のどこがいいわけ？」香子は私に肘で突っついてくる。

「うーん、……無臭なところかな？」私は首を傾げるそぶりを見せた。

「出た出た、いつものよくわかんない天才的表現ってやつ？ホント、何？無臭って」そう言って香子はしかめっ面する。

ここで私はもう一度、お決まりの苦笑。

「はいはい、もうそれ以上突っ込んでくるなってことでしょ？」香子はあきらめて私と一緒に苦笑してしまう。

さすが3年の付き合い、私みたいに思考が分からなくてもしっかり対応してくれる。

私の作り上げた私に。

人の意識が分かり、ただそれに従うだけの自己主張しない私。

そこには本当の私がいるのだろうか？

掃除も終わり。

カバンを持って私と香子は廊下に出ると、長身で学生服の男性が立っていた。

「寺岡くん」私は長身の男性に手を振った。

「じゃーねえー」香子はにやにやしながら、私を置いて走り去ってしまった。

「東條^{とうじょう}、帰るだろ？」寺岡くんが帰るときに言う最初一言はいつもこの言葉だ。

「もっちらん」私もいつものセリフを言って、私と寺岡くんは一緒に廊下を歩き出した。

下駄箱、靴を履き変えて歩き出す。

私と寺岡くんは家が逆方向なのだけど、寺岡くんがわざわざ私を見送りに一緒に歩いてくれる。

「ほら？この前話していたのはどうなったの？えっと・・・ガーなんとかって奴は？」と私は思い出したように言う。

「あー、解散の話だな。あれは・・・」と寺岡くんはお得意の話題を振られて、私が寺岡くんの趣味の独壇場にした。

こうした方が相手も気持ちいいし、何より話題を探す手間も省ける。

あとはいつものようにひたすら相槌をしていればいい。

何故、私はそんなこと知っているのか？

それは私の香りの能力とは全く関係ない。

三年生に上がってすぐに私が寺岡くんに告白して、その時に渡されたものにある。

告白した理由はやはり寺岡くんが無臭の訳を探求しようと思ったか

ら。

そして、私が渡されたもの、それは『寺岡くんの取扱説明書』だ。

そこで、私はようやく思考は読めるのに寺岡くんが無臭の訳が理解できた。

寺岡くんの感情なり生き方なりが、その取扱説明書として具現化されているからだ。

寺岡くんは実はマエカノにも渡しているらしく、別れた後にマエカノが前のクラスにばらまいてしまった。

そのため取扱説明書を前のクラスの皆が周知していて、そのこと自体も寺岡くんは知っている。

無臭の訳を探求しようと告白したその日に答えが分かってしまった。

また、私の暇つぶしが減ってしまった。

「……………で、解散してしまったら、俺の生きる楽しみが減ってしまう」寺岡くんは少し悲観そうな表情を浮かべた。

私なんて物心ついたその日から、特殊であることが苦痛で楽しみも何もない。

自分でも「自分自身、もう終わってもいいんじゃない？」と思ってしまう。

こんなこと、当然口にできない。

どうせそんなこと言うと、皆ひいて雰囲気が暗くなって話が途切れるだけ。

「今、解散しても復活するミュージシャンとかいるから。また復活するかもよ」私は寺岡くんの取扱説明書から引用して言った。

「そうだな」寺岡くんは少し笑顔で肯く。

その笑顔が眩しくて一点の曇りもなく、羨ましくもあり、憎たらしくもある。

寺岡くんの真っ直ぐな表情に、私は少し斜に構えて苦笑いしていた。

私はそんなやり取りをしていると、家の前まで来てしまっていた。

「そう言えば……東條の取扱説明書は出来たのか？」
出したように寺岡くんは言う。

ここも寺岡くんが変わっているところで、寺岡くんは相手にも取扱説明書を請求するのだ。

寺岡くんの取扱説明書によると「彼女に対してこの取扱説明書の請求で、どれだけ別れたことか」だそう。

『どれだけ』と表記されているが、どれだけ付き合ったのかは恐ろしい数字が記載されていた。

面だけはいんだけどねっと私は寺岡くんの顔を見た。

「もう少しだけ、待って」
そう言って私は出来るだけ可愛く手を合わせて懇願した。

私は家に入るとすぐに、いつも一階のキッチンにいる母親と顔を合
わさないように二階の自分の部屋に逃げ込んだ。

両親は私のこの能力を知っているので、両親側からも私を遠ざけよ
うとする。

だから、私は遠ざけられる前に自分の部屋に逃げ出す。

時計を見ると午後五時、そろそろ弟が帰ってくる時間だ。

机の上にカバンを放り投げた。

確かに高校三年生は受験シーズンで推薦にも学力テストはあるけど、
まったく勉強する気がない。

私はベットに寝ころび、手を伸ばして机の上にある一冊の書類を引
っ張り出した。

そのA4の紙をパラパラと捲っていく。

寺岡くんの取扱説明書だ。

その内容というのは

注意事項（嫌なことば、態度、過去の記憶）

好きなこと

嬉しいこと

嫌なこと

寺岡くんの半生が細かく刻まれている。

その中でも私が何度も読んでしまう部分があった。

中学の頃、寺岡くんは虐められていたのだ。

今の（見た目）さわやかな寺岡くんのイメージでは想像できない・・・いや、あの変わり者の寺岡くんならありえるかもと何度も思った。

そのいじめの原因、それは寺岡くんが二択に対してもものすごく強いことにあった。

そんなのはただの偶然だと思うけど、その取扱説明書には二択に対する実験がレポートされていた。

実験の内容は「コイントス」。

他人が打ち上げてキャッチしたコインが裏か表かを当てていくという実験。

そこからずらりとコイントスの回数と正解率が計算されていた。

コイントスの回数は40回、そしてすべて成功を収めている。

その確率は0.000000000009%という訳の分からない確率。

中学生が考えそうで暇な奴らだなっと思ったけど、それからクラスの皆に気持悪がられてしまったと書いてある。

私は立ち上がり、カバンの中にある財布から百円を出して、手をグーにつくって親指の上に百円玉をおいた。

ピン

百円がくるくると舞いあがり、手の甲で百円玉を受けて手の甲にもう一つの手を被せた。

「えーと、しまった。どっちが裏表なのか決めてなかった」えーと、確か百円の数字が記されてあるほうが裏で、百円玉のアジサイのほうを表だ。

「表」私は被せた手を開くと、裏の数字が記されていた。

ちっ、と私はもう一回やったが予想は表、結果が裏で失敗。

私はため息を漏らして、もう一度ベッドに寝転んだ。

私の体に押しつぶされたしわしわの「寺岡くんの取扱説明書」をもう一度手に取ってみた。

他の人間は私の前ではすべてさらけ出されてしまうけど・・・な
んで、この人はこんなにも自分をさらけ出せるんだろうか？

バタバタと家の階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

弟だ。

「ネエちゃん、夕飯食うってさ」私の部屋の通りざまに弟の声が聞こえる。

弟は中学三年生で、これから夕食を食べて塾に向かう。

私はそれに合わせて一緒に食べないといけない。

ため息を漏らして自分の部屋から出て狭い廊下に出ると、隣の部屋の扉が開いて弟が現れた。

弟には一年前ぐらいに完全に身長が抜かれてしまった。

ひょろっとした体だが、春だというのにサッカー部での去年の日焼けがすかに残って色黒だ。

弟には私の能力を家族で秘密にしている。

もちろん、弟には私と同じような能力はない。

「あんた、頑張んなさいよ」私は弟に言う。

「ネエちゃんもな」そう憎まれ口を叩いて、私を抜いて階段を下りていく。

私にできることはこんなことだけ。

ごめんね、私は自分自身すら救うことができないのに他人を救うことなんて無理だ。

弟は口には出さないが高校受験で切羽詰っているのが香りで容易にわかる。そして、学校の問題、女の子との関係、勉強、不安、恐れ、プレッシャー。

私よりも一回り以上大きくなった弟の背中を眺めながら、私も一階に下りていく。

Two

桜には葉がそろい、それを激しく揺らすように雨と風の嵐。青臭い木々の香りは吹き飛び、雨とジメジメした匂いが漂う。

梅雨の到来だ。

放課後。

「勉強なんてしないでいいだろ？」私についてきながら、寺岡くんは必死に主張する。

「何言ってるのよ。この前の学力テストが散々だったくせに」私はそう言って寺岡くんを睨みつける。

私の香りの能力、『寺岡くんの取説』そんなもの使わなくても、寺岡くんが勉強嫌いなのは知っている。

授業中なんて起きている姿を見たことない。

私たちがたどり着いた先は、高校の端にあるレンガ様式の図書館。

そこは、勉強の教材や学習室などもあり勉強をする環境が整っている。

「寺岡くん、高校卒業してどこに行くわけ？」私は寺岡くんの有無を言わずに学習室に入っていた。

仕方ないといった顔で寺岡くんも付いてくる。

学習室の中はエアコンの除湿が利いていて涼しく、皮膚がサラツとしてきた。

学習室の中には二人分の学校と同じ机と椅子が置かれている。

私は座って、手早く今回の学力テストのプリントを机に出した。

寺岡くんはため息をもらしながら私の前に座った。

「まず数学で……」私は学力テストの数学のプリントを出してそれに関係する教科書なりノートを開いて並べた。

寺岡くんは寺岡くん自身の学力テストのプリントを広げた。

プリントの半分は白紙になっている。

「じゃ、この白紙の問題から」私はそう言って、公式なりを説明し始める。

それを「はい、はい」となんとなく肯きながら寺岡くんは私の話を聞く。

私は弟に勉強を教える実験台として、手っ取り早く寺岡くんを選んだ。

別に教える場所はどこでもよかったが、私が家にいると両親や弟の神経を逆なでしてしまう。

弟は夜遅くまで塾に行き、私と言えば夜十時までドラマを観てからもう寝てしまう。

だから、とりあえず学校で勉強しているということだけで時間を潰すのだ。

「こんなこと知らなかったら解けるわけないだろ？」と寺岡くんが

呆れた声を出すので、私は大きくため息をついた。

駄目だ、きっとこれは役に立たない。

寺岡くんのテストのプリントの半分は白紙だけど、白紙でないところは全て正解している。

しかも、のみ込みが早くて寺岡くんは今回の学力テストを一気に網羅してしまっていた。

要するに寺岡くんはまったく勉強してないだけ……これじゃ、勉強の教え方の勉強にならない。

「楽勝、楽勝」そう言って寺岡くんは背伸びをする。

それでも、梅雨で夏も近づいてきているというのに外は暗くなっていた。

間違いない、寺岡くんは私と同じ感覚派だ。

「なあ、なんでまだ東條は俺のことを『くん』付けで言うんだ？」
帰り支度のために鞆にノートを入れ終わった寺岡くんは私のほうを

見た。

唐突な質問、ノートや教材をまだ鞆に入れていた私は苦笑を浮かべた。

だから、どうしてだ？って感じで寺岡くんは私をまっすぐ見る。

こういう思いつきや純粹に質問されるときは、私の能力が無意味なことに気づく。

何かを期待する質問でもなく、唐突で純粹な疑問。

きっと、これもまた寺岡くんが無臭である由縁だ。

「なんか、ずっと『くん』付けしてたら抜けなくなっちゃった」と、これでいいのかな？って疑問に思いながら私は答えた。

「ふーん」とわかったって感じで寺岡くんは頷く。

実際に、私には『くん』付けする理由があった。

寺岡くんと付き合うことになって、『変人でイケメンの人が好きな私』というレッテルがクラスの皆から増えてきているから。

もちろん誰もそんな事を口にするわけではなく、私の香りの能力。

私から告白しておいてなんだけど、少しでも他人行儀がしたいのだ。

一学期も終わり、世間は夏休みなのだけれど……私を除いた受験生は休みなどではない。

私と香子は朝からの真夏の嫌らしい日差しを避けるため、隣町のカフェでコーヒーを飲んでいた。

学校の近くにもカフェがあるのだが、クラスメイトと会いたくないのであえて隣町にやってきていた。

まだ昼前だったため、人も少なくカフェの中はひんやりと冷房が効いている。

人は少ないのだがカフェ自体も小さいため、満席となると冷房が効

いているのにもかかわらず、人の熱気でどこか蒸す感じだ。

「ええー！寺岡とはもう、別れちゃうわけ？」と香子は私の決断に驚いたような表情を浮かべていた。

が、その裏では「やっぱりね」と香子の香りがする。

香子とは付き合いが長いので、そう思われても当然かなと分かっていた。

香子の勉強の付き合いでカフェにいるのに、結局恋話に行ってしまう。

テーブルに並べられている教材が空しい。

「親が『受験生が恋愛してる場合じゃない』って煩いのよ。それに、うちの弟が中学受験で精神的に不安定で荒れてるからなおさら」私は苦笑しながら言う。

ストローで目の前のコーヒーを一口飲んで、私は小さなため息を漏らした。

香子は少し私に気を使って、だまってコーヒーを飲む。

親のことはどうでもいいけど、寺岡くんとの関係はそろそろ引き際なのは感じていた。

寺岡くんに勉強を教えると、あっという間に私の学力に追いついてしまった。

私には勉強を教える才能があるんだ、って思いたいけどやはり寺岡くんの才能だ。

弟の方は努力がなかなか実らず、学力は横倍。

弟は荒れに荒れて壁を殴るはガラスが割れるわ。

私の家は日本で一番の危険地帯だ。

「寺岡くんに最後に言ってやろうと思うの『なんで、おっぴろげに自分の取説なんか渡すの』って」私が笑顔で言うと、香子はうんつと肯いた。

香子も『寺岡くんの取説』の存在を知っていたが、私は香子に取説

の内容を話したことはなかったし、香子からは思っただけでも「見せて」っと要求されることもない。

香子のそういうところは友達として安心する。

「やばい、そろそろ行かなきゃ」私はそう言って教科書をバックに入れた。

香子の教科書は最初に開いたページのままだ。

「私はもう少しここにいますから」香子はそう言って、肘をついてゆっくりとコーヒーを一飲みする。

思考ではすでにやる気なしで、このままぐだぐだしていく気だ。

「じゃ」私は香子に手を振ってカフェを後にした。

コブンの奴、宿題出しやがって。香子の香りが微かに聞こえた気がする。

カフェを出ると皮膚を刺すような日差しと熱気。

私は日傘を開いて、陽ざしから体を守る。

しかし、日傘自身も陽ざしの暑さを吸収してどんどん熱くなってきた。

その熱気を持った傘が今度は私を蒸し焼きにする。

しまった、待ち合わせを海の公園なんかにするんじゃないかった。

私は日傘というサウナに入って、心底後悔しながら歩き出した。

やっと公園の近くまで来ると、海の匂いがほのかにし始める。

公園が見えると、その先は砂浜と海。

砂浜の方では家族連れ、サーファー、カップルなどが楽しそうに遊んでいるのが分かる。

私は空を見上げた。

まるで、私がいつも見る夢のように眩暈をしそうな青空が広がっている。

海も夢のまま、青々しさが逆に夢の中の息苦しさを呼び覚ましていた。

待ち合わせのベンチまではまだ先だけど、しかたない。

私は近くのベンチに座り、息を整える。

汗が出るがとても冷たくて、これは夏の暑さのせいじゃない。

そして、深海に一人沈んでいくさまが見えて、私は俯くと目の前が一瞬真っ暗になった。

失神？

これで、やっと私の人生は終わりなのかな。

目の前が真っ暗になった理由に気づき、つい口走りそうになるのを堪えた。

違う、私の前に人影が差したんだ。

私はゆっくりと顔を見上げる。

目の前にはキャップが外れているアクエリアスのペットボトルが差し出されていた。

「なんて顔してるんだ。飲めよ、ペットボトル開けたばかりだから」そう言って、人影は私にペットボトルを手渡す。

そして、その影の先にはいつもの憎たらしい寺岡くんの心配する顔があった。

私は何も言わずに、アクエリアスを飲みはじめた。

体に水分が染み渡っていくのが分かる。

少しずつ落ち着いてきて、遠くから子供たちの遊び声がかすかに聞くことができる。

私はボーっとする頭を横に振って、長いため息を漏らした。

寺岡くんは私の表情を見て安心し、私の隣に座った。

「ねえ……二択が強いんでしょう？私一度でいいからコイントスやってみたかったの、やりましょう？」私は言った。

寺岡くんの取扱説明書には、コイントスや二択の実験の話は禁止事項に選ばれている。

私は挨拶やらお礼やらそっちのけでお願いした。

寺岡くんは訝しげな表情を浮かべたが、しばらくして黙ってうなずいた。

私は百円玉取り出して、親指でピンッと跳ねさせて手の甲で受ける。

「100円の数字が裏で、アジサイが表」私はコインを受け止めた手を寺岡くんに差し出した。

「裏」寺岡くんは即答した。

手を開くと、確かに100円の数字だ。

「もう一回」私はコイントスをする。

「裏」寺岡くんが言い、私が手を開くと表であるアジサイ。

「もう一回」今度は寺岡くんから私に言い、私はコイントスをする。

何度やっても、私のコインの出目は100円の数字の裏が続いた。

20回ぐらい連続で裏が出続けたところだったか、寺岡くんは首を横に振った。

「もういい、ここまでやると俺でもわかるよ」寺岡くんは私から百円玉を取り上げた。

百円玉を確認して寺岡くんはため息をついた。

私の使った百円玉は両方とも裏の100円の数字が描かれている。

「これじゃ裏しか出ないから、二択にならないだろ？」寺岡くんはそう言って、寺岡くん自身の財布から百円玉を取り出して私に渡す。

渡された百円玉は何の変哲もない百円玉だ。

私は何も言わずにコイントスを始めた。

そこから、寺岡くんの20回連続的中となった。

「疑ってはいなかったけど、試してみたかったの」最後に、と心の中で付け加え、

「寺岡くんも本当に特殊な能力を持ってるんだね」私は少し嬉しそうに言った。

「そうだ……なかなか待っても作らないから、俺が作ってくたぞ」寺岡くんは思いだしたように言って、バックの中に手を入れる。

寺岡くんは無理やり話を変えて、二択の能力の話題をしたくないんだ。

寺岡くんは私にA4の紙の束を手渡した。

A4の紙の一枚目にはタイトルが書かれている。

『東條の取扱説明書』

私は日傘を寺岡くんにあずけて、A4の紙の束を開いていく。

よく作られていて、確かに……確かに私に作られた私の性格や、趣味やら。

「こんなの私じゃない!!!」私は最後まで読むことなく、A4の束を寺岡くんに投げつけた。

こんな人間を私が作り上げたんだ。

表紙からぶつけたので最後のページが見えた。

その最後の一行に私は絶句してしまった。

『東條はどんどん先読みして話すから、まるで俺の心が読めるようだ』

ポロっと私の瞳に一粒の涙がこぼれた。

寺岡くんは私を見つけてしまっていた。

最後の一行だけ、たった一つが私の取扱説明書……そして、そのたった一行が私のすべてだ。

寺岡くんは私が最後のページを凝視しているのに気づいて、寺岡くんもそのページを見た。

「あ、すまん。気を悪くしたか？ ちょっと思いつきで書いただけで・
・悪気はないんだ」寺岡くんは最後のページを束から剥がし取るうとした。

私は思わず、寺岡くんの腕を握ってそれを阻止させる。

「ねえ、なんで寺岡くんは説明書なんか作ったりして自分をこんなにおっぴろ気に出せるわけ？」私の瞳にはもう一粒の涙がこぼれた。

寺岡くんは私の涙に驚きながら、涙のワケを考えるより私の質問に対する答えことに集中していた。

「好きになった人にはなんでも自分を知ってもらいたい、嬉しいことや楽しいことを共有したいって思ったからだな」寺岡くんはまっすぐな瞳で言った。

そこにはいつもの何も香りの感じない、まるで色で表すなら空気のように無色だ。

私の周りの閉塞感が、パンクしたかのように圧力が抜けていく。

「私から告白したのに？」私が小さく呟くと、寺岡くんは肯いた。

「そんな自分勝手なこと……人なんだから相手の知りたくない部分だっていっぱいあるんだよ！」私は寺岡くんの腕から手を離した。

「でも……私は他人が人に知られたくない人間の部分を嫌というほど知ることが出来るんだ！もう、嫌だ。こんな人生じゃないよ！！」私は寺岡くんを睨み付けた。

寺岡くんは私の取説の最後の一行と私の言動と表情を見比べた。

「読めるのか？心が……」寺岡くんは驚いた表情で呟く。

私は肯いた。

初めて、両親以外の人に告白した。

「凄いな」寺岡くんは明るい声で言うが、すぐに暗い表情になる。

寺岡くんの香りは、いつものように無臭で疑ってる様子すらない。

寺岡くんが純粹なのはわかっていたが、私としてはとても複雑だ。

他人に私の能力を受け入れられると、私のこの能力は本当に存在するんだなと再認識して嫌になる。

「でも、泣くってことは東條はその能力が嫌なんだな」寺岡くんは落ち着いて言う。

私は何度も肯いた。

「それじゃ、俺がその能力を取っ払ってやるよ」寺岡くんは座っている私の前に立った。

「さて・・・頭のいい東條に二択の問題です」寺岡くんは明るい声で私に問いかけた。

私は驚いて寺岡くんの顔を眺めた。

寺岡くんはとても楽しそうだ。

「東條のその能力は消えてなくなってしまう、○か×か」寺岡くんは中腰になって私に指差す。

「生まれた時からあるんだから、消したくても消えるわけないでしょ」私は強い口調で言う。

「東條は×な。だったら俺は○だ。消える、必ず・・・・・・・・二択に強いこの俺の言うことを信じろ」寺岡くんは笑顔で私の手をそっと握った。

寺岡くんの香りは相変わらず無臭であるが、何か強い自信のようなものを感じる。

私は寺岡くんの手を握り返して、大きく肯いた。

あのむさ苦しい夏が過ぎ、秋を迎えると木々たちは紅葉に染まり始めていた。

風からは生暖かい湿気が終わり、少しカラッとした涼しさが戻ってくる。

でも、これもあと少ししたら極寒の冷たさに変わる。

私はあれから夏風邪をひいてしまっていた。

本当は滅多に風邪をひかないのに、今年の夏風邪はたちが悪くて夏休み中ボーっと頭が回らなかった。

クラスメイトは夏期講習で忙しいだろうに、私は家でぶらぶらしている。

あまりに暇だったので、私は夏休みの間「私の取扱説明書」の作成に取り掛かっていた。

少し時間が空けば、寺岡くんを呼んでコイントスをひたすらやるのが恒例行事。

寺岡くんの好きなミュージシャンが解散してガッカリしているので、寺岡くん的には気分転換になるらしい。

私と寺岡くんの関係は変わることなく続くことになった。

Three

私の体は徐々に深海へと進むのがわかる。

徐々に空からの光が遠のいていく。

私はうつ伏せになって深海に目を向けた。

深海の暗さで、底を全く感じるができない。

だんだんと、水圧で息苦しさを感じてきた。

私は、「助けてほしい！」とただ落ちていく深海の先に手を伸ばしていた。

ふっと・・・私は背中を何者かの手で突っつかれるのに気付いた。

私は体をねじって、仰向けになる。

深海のために、仰向けになったはずなのに海面からの光すら見えずに真っ暗だ。

闇の向こうから一つの手が私に差し出される。

私はその手を握るとその方向に引っ張られるのが直感的に分かった。

しかし、方向感の無くなった闇にいる私は一瞬躊躇する。

その手の先にあるのは海面なのか、本当の深海の闇なのか。

でも、私は思い切ってその手を握った。

二択に強い寺岡くんだったら言うはずだ……その先は青い空と海だって。

ふっと夢と現実を飛び越える瞬間を感じた。

私は目を開くと、その先には病室の天井がある。

「最近、この夢が多い」と私がつぶやいていると、タイミングよく病室の扉をノックする音が聞こえる。

「どうぞ」私はせき込みながら言って、体を起こした。

外を眺めると日が暮れていて、すでに暗くなっていた。

「よお！ミカン持ってきたけど食べるか？」病室の扉が開くと寺岡くんの元気な声が聞こえた。

今日は平日だから、寺岡くんは学校帰りで学ランと学校指定のバツクだ。

「食べる、食べる」私は病室のベットの上で足を組み、手を出してミカンをねだった。

そう言えば偶然なことに、確か私の取説の好きな食べ物にミカンって書いた気がする。

寺岡くんはミカンの入った袋を手渡し、私は中を見ると一個を取り出した。

「入院している割には元気そうだな」寺岡くんが言う。

私は笑顔で肯ぐが、少し咳込んでしまった。

私は夏休み終わってすぐの大学推薦に合格し、意気揚々といっていると急に体を壊して入院することになった。

入院を宣告され、「いよいよ、私の人生も終わりか」という考えに一瞬ふけたのだが・・・。

長い夏風邪の上に大学推薦が重なって体がかなり疲弊してしまい、私は肺炎にかかってしまったらしい。

「咳大丈夫か？・・・でも、18歳で肺炎って珍しいよな。肺炎って言ったら年寄りの病気ってイメージがあるけど」寺岡くんは心配そうな顔をしながら、まじまじと私を見る。

「医者が言ってたけど、今は若い人での肺炎も流行ってるみたいだよ」私はお年寄りと言われて、少しムッとなってしまった。

肺炎にかかって鼻が詰まってしまったのか、匂いを嗅ぎにくくなってしまった。

「あれやってよ・・・コイントス」私はそう言って用意していた

百円玉を取り出し、親指で跳ね上げて手の甲で受け止めて手で隠した。

「裏」寺岡くんは言って、私は隠した手を開くと確かに100円が現れていた。

「これで、100連勝だ」私は嬉しそうに言う。

「よく数えてたな。この暇人が」寺岡くんは呆れた表情をした。

「こんなに二択が強かったらギャンブルでもやってみたら？ほらよくあるじゃない、半！丁！って？」私はサイコロを投げてカップで閉じるしぐさをする。

「それがさ……ギャンブルとか金がかかると二択の強い俺もからっきしなんだ」寺岡くんは残念そうな顔をする。

「世の中ってよくできてるね」私は笑顔で言った。

「……それじゃ、この100円をかけてコイントスしましょ」
そう言って私はコインを跳ねて、受け止めた。

「おい、やめろって」寺岡くんは苦笑する。

「裏？表？」私は楽しげに寺岡くんに聞いた。

「裏」寺岡くんは即答したが、表示は表のアジサイが出ていた。

「やった！連勝は100でストップ」私はガッツポーズをする。

「だから嫌だったんだ」寺岡くんは愚痴るように言った。

「そう言えば……勉強は順調なわけ？」私は寺岡くんに尋ねた。

「相変わらずコブンはうるさいけど、勉強なんて楽勝だ」寺岡くんはため息交じりで言った。

寺岡くんは私が行く大学のもう一つ上の地元の大学を受ける気みだ。いだ。

寺岡くん自身もそんなに目指してと言うわけでもなく、漠然とその大学を受けるらしい。

私も自分が行く大学を選んだのはレベルが高いのと、地元からかなり遠くて誰にも会わずに一人暮らしが出来るからだ。

「余裕だねー」私は寺岡くんに肘で突つつく仕草をする。

「もう大学が決まっている奴に言われたくないぞ」寺岡くんはそう言って笑った。

寺岡くんとの関係は順調だ。

私が入院していなくなった家では平穏が訪れているらしく、弟もスランプを脱出して少しずつ成績が伸びて精神的に安定しているらしい。

閉塞感もなくなり、大学も決まってすべてが順調なはずなのに・・・
・・・表現できない、この纏わりつくような不安が私を絡みとっていた。

快適な季節から、寒くて凍える季節へ。私はこの季節は雪以外はみんな嫌いだ。

ドスン！！

私の隣の部屋から物と物がぶつかる音が聞こえてくる。

私は一瞬ビクッと体を震わせたが、やれやれまたかっと机に開いた作成中の私の取扱説明書に目を落とした。

私の隣の部屋は弟の部屋だ。

外を眺めると、今日の天気予報通りに深夜から雪が津々と降り始めていた。

大気が済んでいるから家の中からでも微かに星が見える。

「寒い」私は机の下に置いている暖房器具の温度設定を上げた。

私が退院して、また家が荒れ始めていた。

よいよ、弟の学力が天井を迎えたようで、一向に成績が上がる気配がない。

ドツドツドツドツ

今度は一階から二階へ駆け上る階段の足音が聞こえる。

階段の音の大きさからして父親だ。

弟の部屋から勢いよく扉の開く音が聞こえて、父親と弟の口喧嘩が始まった。

喧嘩の勢いが凄まじいので、殴り合いでもしてるんじゃないか？といつも思う。

私はイヤホンをつけて、ウォークマンで音楽を鳴らした。

寺岡くんお気に入りのミュージシャンの音が流れてくる。

そして、私の取扱説明書に弟と父親の喧嘩について書いてあった。

突然、私の部屋の扉が開いて父親が入ってきた。

「何？」私はイヤホンを外して不思議そうに父親を見た。

もう、父親が私の部屋に入るのは何年振りだろうか。

父親は口喧嘩で顔を真っ赤にさせて、ものすごい剣幕で私を見ていた。

「和也^{かずや}の心を読め！！」父親は懇願するように私に叫んだ。

こんなこと言われたの初めてだ。

まるで頭を殴られたような衝撃が来た。

私は大きなため息を漏らして、イヤホンを耳に付けて机に向かった。

「いいから読め」父親は座っている私の胸ぐらを掴んだ。

「自分から手放しておいて、都合のいい。あんたたちの問題はあんたたちで解決しないさいよ！」私は父親を睨んだ。

私は父親にこんなにはっきりと言ったことがない。

父親は一瞬悲しい目をして、私の部屋を出て行って一階に降りて行った。

入れ替わりで、今度は弟の和也が部屋に入ってきた。

「ネエちゃんは心が読めるのかよ？」和也が私に叫んだ。

隣の部屋だから、父親の声が聞こえていたんだ。

「安心して、もう心は読めないから」私は宥めるように和也に言った。

確かに、寺岡くんの言うとおり私のこの能力は無くなっていて、退院していつの間にか匂いが分からなくなっていた。

「それじゃ、今まで俺の気持ちを読んで見下して嗤ってたのかよ！」和也はもう一度私に叫んだ。

「笑えるわけじゃないじゃない、たった一人の弟なんだから!!」私も負けじと叫んだ。

和也は少し体を震わせて、私の部屋を後にした。

私の家族は割れる音もなく崩れてしまった。

和也の受験が三月だから、あと二カ月の辛抱だ。

このどうしようもない憤りをどうにかしたくて、壁を軽く殴ってみた。

どうせこの部屋も大学に入ったら出ていくんだ。

ドン

「痛！」私は予想以上の拳の痛みに驚いてしまった。

殴られる方も痛いけど、殴る方も痛い。

窓の外を見ると、隣の家の屋根に雪がかすかに積もっているのが分かる。

私はもう一度大きなため息をついて、机に向かった。

闇の向こうから一つの手が私に差し出される。

私はその手を握るとその方向に引っ張られるのが直感的に分かった。

しかし、方向感の無くなった闇にいる私は一瞬躊躇した。

その手の先にあるのは海面なのか、本当の深海の闇なのか。

私は思い切ってその手を握った。

握った手は私を引っ張っていく。

そして、その手の先には海面が見えてきた。

勢いそのまま、腰が海につかるところまで私は水面に浮上した。

潜る前の世界とは全く異なっていた。

そこは、雲で覆われたどす黒い空。

海もまるで墨のように黒ずんでいる。

肌寒くて、海面は荒波のようにしけていた。

そこで、私は元の世界に戻れないことを悟ってしまい、海に浸かりながら大声で泣いてしまった。

……夢と現実を飛び越える瞬間が訪れた。

眼を開くと、涙がまぶたに溜まっている。

眼をこすって周りを見渡すと、同じクラスメイトが大学受験に向けた模擬試験を必死に解いていた。

教壇には古文のコブン。

卒業まであと2週間。

教室の時計を見ると、試験終了まであと10分もある。

この静かな教室で、私の席のとなりにある暖房器具だけがゴーゴー音を鳴らしている。

今日は氷点下で、どんよりとした雲。

この教室と室外の温度差、席の隣が暖房機器なんて『寝るな』っていう方に無理がある。

前の席に座っている香子も項垂れていて、どうやら寝ているようだ。

香子は早々に看護の専門学校を合格して、私と同じ立場なので模擬試験は関係ない。

私はやったけどねっと答案を眺めて、クラスの一番前の誰も座っていない席に目を向けた。

その誰も座っていない席は寺岡くんの席。

寺岡くんは私の行く大学もすべり止めて受けて合格していて、今日

が本命の大学の受験だ。

私が教えたんだし、成績から見ても寺岡くんは本命の大学は絶対に合格する。

私が誰にも聞こえないようにため息をついた。

キンコーン、カンコーン。

チャイムが鳴り、クラスメイトは一斉に答案を自分の前の席に渡していく。

「はー、めんどくさいね」香子は眠気眼で私に言う。

私はビクツとして、いつもの苦笑を表した。

私は間違っていた。

私の相手の思考が分かる能力がなくなれば生きていけると思っていたが、それは間違いだった。

私は相手の思考が分からないのが、こんなに不安で怖いことだと知らなかった。

きつと、普通の人なら経験的に相手の態度や行動から思考を考えるのだろうけど、私には能力があったからその経験が絶対的にかけている。

私は誰に何を訊かれてもビクツと体が震えてしまう。

「寒いのか？体調悪いとか？」香子が心配して私に言う。

「これから昼休みだけど、早退しようかな」私は小声で言った。

「また？最近調子よくないみたいだね。でも大丈夫？内申書まずいんじゃない？」私は香子の言葉に首を横に振った。

「その時はその時だよ」私は立ち上がり、教室を急いで出ていく。

コブンに頼んで早退させてもらい、私は学校を後にした。

弟は何とか第一志望の高校には合格できたが、家にはもう私の居場所はない。

そうだ、寺岡くんによつと出来上がった私の取扱説明書を渡しに行こう。

もう昼過ぎなので、寺岡くんの受験も終わっているはずだ。

寺岡くんの家に行き、チャイムを鳴らすと案の定寺岡くんが現れた。

そして、寺岡くんの部屋に上がらせてもらった。

「あのさあー、言いにくいんだけど……」寺岡くんは頭をかい
た。

「取扱説明書だったら出来てるよ」私はそう言ってカバンから取り出して、寺岡くんの前に差し出した。

「あ、いや、そうじゃなくて……」と言いながらも、寺岡くんは私の取扱説明書を読んでいく。

たぶん、私の家族のことや能力がなくなったことだろう。

寺岡くんは私をちらつと見るが、すぐに取扱説明書に目線を落とす。

「親父さん酷いな」寺岡くんは小さく呟いた。

私の思いを知ってくれている人が、この世にたった一人だけできた。

それがどれだけ胸を刺すか、キュツと胸を締め付けられた気分だ。

「何も考えなくていい」寺岡くんはそう言って、私に取扱説明書を返した。

でも、私のことを知ってくれる人と私は離ればなれになってしまう。

そして、私の生きる場所がすべて奪われてしまう。

「相手の思いなんて気にしないでいい。優しくいれば、周りからも優しくしてくれるんだから。東條は弟思いだし……ごめん、気づいてあげられなくて」寺岡くんは私を抱きしめた。

私は胸が苦しくて、嗚咽をおぼえた。

「やめて!!」私は寺岡くんを突き放した。

「私はそこまで望んでない……どうせ離れ離れになるんだから。これ以上嬉しいこと知りたくない!!」私は寺岡くんに向かって叫んだ。

寺岡くんは困った顔で私を見ている。

「そのことなんだけど……」寺岡くんはもう一度頭を掻く。

「はっきり言ってよ!!」私は寺岡くんを睨み付けた。

「東條に勉強も教えてもらって感謝してるんだけど……今日、寝坊しちゃってさ」寺岡くんは落ち着かない態度だ。

私は目を丸くした。

「それで……大学受験を受けなかったから、もう東條と同じ大学に行こうかなーって思ってたさ」寺岡くんはハハハッと笑って誤魔化した。

「何が、行こう『かなー』よ? 笑って誤魔化さないで」泣くのを我

慢している私は、か細い声で言った。

「ごめん、同じ大学に行こうぜ。人間が怖いんだったら俺が練習相手になってやる、家族のことだって時間が解決してくれる」寺岡くんは笑顔で言った。

「さて・・・頭のいい東條に二択の問題です」寺岡くんは明るい声で私に問いかけた。

私は涙を流しながら、首を縦に振る。

「〇・・・〇なんでしょ？」

「うん・・・そう、俺も〇。東條の力なら絶対に乗り越えられるよ」寺岡くんは笑顔で私の頭を撫でてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1450bs/>

私の取扱説明書

2013年7月13日10時28分発行